

あわよくば

2 MARK 勝負

極上のファンサービス、ペアボートを復活させよ

3月号の「探偵局」で「アスリートキャンプ」の様子を調査し、その中でパラアスリートを乗せたペアボートが参加者の間で大好評だった。かつては全国のレース場で行われていたペアボート試乗会だが、近年は全く実施されなくなった。これはファンがケガする事故が発生し、一気に自粛ムードが広がったから。その後のコロナ禍が追い打ちをかけ、調べ得る限り6年以上、レース場で行われていない。

探偵局では、佐藤大介と後藤陽介が「ボート界にとって、ペアボートは大きな武器」と話している。ペアボートを体験したパラアスリートたちは一様に目を輝かせ、その迫力に舌を巻いていた。

かく言う私も1年ぶりに乗せてもらったが、カポックを着てヘルメットをかぶった時からワクワクし、他では味わえない疾走感、水面から見える景色、危険と隣り合わせだから感じるスリル。2周でも足がガクガクするほど体力が奪われるなど、ペアボートは非日常の塊だ。

ペアボートができなくなった代わりにVRスプラッシュユバトルで選手の擬似体験ができるようになった。非常に面白いゲームで、様々なイベントでも遊べる機会が増えている。ボートのことを広くアピールするにはこの上ないコンテンツだといえる

が、やはり本物とは別物だ。パラアスリートには、下半身に障害を抱えている人もいる。ペアボートでは前に乗る人に、取っ手をしっかりと握っておくように言われるが、実際は下半身の踏ん張りも重要。パラアスリートは踏ん張れない分、ドライバーの選手たちは安全運転で旋回する。普段は一発でハンドルを入れるところも送りハンドルになるし、あえてターンマークを外すように指導されていたのも印象的だった。

一般ファンのペアボートのレギュレーションもこれでいいのではないだろうか。全速にしても直線の速度は通常の半分程度。それでも水面ストレスを走行し、ほんの少しの波でも、こんなに跳ねるのかとスリルを感じる。旋回を慎重に運転することで少々迫力に欠けようとも、長い人生で数回しか乗る機会がない一般人にとっては、その違いなど分からない。選手にはとにかく安全に運転してもらおう。これを徹底するしかない。

今のルーキーはペアボートを操縦することがない選手がほとんど。あまり長く空白の期間が空くと、せつかくの極上コンテンツが途絶えてしまう。編集部にもいまだにペアボート復活を望む声が届いている。そろそろ本格的に復活を考える時期ではないだろうか。(ウエスギ)